

今回の解説には「音からのイメージ」に言及している部分が多いが、これはあくまでも筆者の個人的な感覚によるものであり、読者の方々とは異なることもあるが、「こういう感じ方もあるな」という温かい目でご一読いただけるとありがたい。

## 幻想序曲《ロメオとジュリエット》 (チャイコフスキー)



P.I. チャイコフスキー(1840-1893)

チャイコフスキーが30歳になる直前に作曲した幻想序曲『ロメオとジュリエット』は、イギリスの劇作家シェイクスピアの戯曲を題材とした演奏会用序曲である。

プロコフィエフの同名バレエ音楽などとは異なり物語に沿った構成ではなく、楽想を自由に書き綴ったものである。チャイコフスキーの作品には、この他に『ハムレット』及び『テンペスト』という2曲の

幻想序曲があるが、いずれもシェイクスピアの戯曲を題材としている。この曲の特徴は、序奏及び終結部を伴ったソナタ形式で構成されている。

### (1) 序奏

クラリネットとファゴットにより序奏主題が演奏される。これは一般的には「ローレンス僧の主題」と言われているようで、正義感を示していると言えよう。続いて弦楽器が、物語の舞台となっているイタリア北部ヴェローナの不安に満ちた様子を演奏する。続いて現れるハープのアルペジオが夜明けを表している。広場にモンタギュー家とキャピュレット家の面々(以下「両家」という)が登場してくる。チェロによって演奏される音形は、先ほどの序奏主題の反進行となっており、両家が、正義とは反対の「対立」関係にあることを意味している。

両家が睨み合いによって気持ちを高ぶらせる様子を、木管楽器と弦楽器が同音で掛け合いし、さらにテンポを徐々に速くすることで表現すると、曲は提示部に入る。

### (2) 提示部

第1主題は、「両家の対立抗争」を題材としている。途中、弦楽器と木管楽器が同じ音形を2拍ずらして演奏するが、これは